

金沢大学附属図書館蔵暁烏文庫本『伊勢物語首書抄』 翻刻(六・完) :  
付・『伊勢物語首書抄』 頭注についての覚書

|       |                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/46378">http://hdl.handle.net/2297/46378</a>             |

# 金沢大学附属図書館蔵暁烏文庫本

## 『伊勢物語首書抄』翻刻（六・完）

― 付・『伊勢物語首書抄』頭注についての覚書

村戸 弥生

### はじめに

本稿は延宝二（一六七四）年刊本『伊勢物語首書抄』下冊（第四九段から第一二五段）の第一一〇段から第一二五段までの翻刻であり、「翻刻（一）」「市民大学院論文集」第3号、二〇〇八年三月刊（上冊第一段から第二〇段）、「翻刻（二）」同第4号、二〇〇九年三月刊（上冊第二段から第四八段）（以上は二〇〇七年度、二〇〇八年度の金沢大学市民大学院テキスト文化学専攻日本文学研究ゼミの成果）、「翻刻（三）」「金沢大学国語国文」第36号、二〇一一年三月刊（下冊第四九段から第六八段）、「翻刻（四）」「金沢大学国語国文」第37号、二〇一二年三月刊（下冊第六九段から第八六段）、「翻刻（五）」「金沢大学国語国文」第38号、二〇一三年三月刊（下冊第八七段から第一〇九段）に引き続きものである。翻刻にあたってはこれまで同様、金沢大学附属図書館蔵暁烏文庫本を底本に用い、不明な箇所は同版の石川県立図書館李花亭文庫本により補う。【底本書誌】【凡例】

は「翻刻（二）」の記述によりたい。なお、翻刻は今回で完結するので、本書頭注が他の古注釈との比較においてどのような位置付けにあるかを覚書として記しておく。

### 本文翻刻

（第一一〇段）

百十

昔、男みそかに、かよふ女有けり。それがもとより、こよひ夢になん見え給ひつるといへりければ、男

思ひあまり出にし玉の有ならんよぶかくみえば玉むすびせよ

百十

こよひ夢になん 業平のこよひ夢に見え給ひし、と女の方よりいひやれる也。

○思ひあまり出にし……そなたの夢に我みえし、といへるは、我たましゐの通ふによつてみゆる也。よふかくみへば、むすひとめよと也。人だまのとべはむすびとゝむるなどいふ事あれば、そのこ

とくよふかくとぶといへは、わがたましゐぞと思ひ、結びとゞめ給へと也。

(第一一二段)

百十一

昔、男やむごとなき女のもとに、なかりにけるをとふらふやうにて、いひやりける

いにしへはありもやしけん今ぞしるまだみぬ人をこふる物とは返し

下ひものしるしとするもとけなくにかたるがごとは恋すぞ有べき又返し

恋しとはさらにもいはじ下紐のとけんを人はそれとしらなん

百十一 なく成にけるをとふらふやうにて 人のなかりたるをとふらふよしにて、歌をやる也。

○いにしへは有もや…… 昔は有し事やらん、なき事やらん、しらす。まだみぬ人を恋るといふ事はためしあらじ、我初にてあらんと也。

○下紐したひものしるしと…… 人にこひらるゝ時は、下紐のひとりとするが、我下紐は今までとけたる事なし。そなたのいふごとくにはあらじ。恋ると言は空ごとならんと也。

○かたるかごとは かたるにはあらず、いふがごとくと言心也。

○又かへし 業平也。

○恋しとはさらにも…… 女の歌に、恋しからねばこそ下紐はとけずと思ふに、取あはずして、こなたより恋し共いふべからず、こふるに下紐のとくる物ならば、我思ひ有ばとくべし、其時我思ふとしり給へとなり。

(第一一二段)

百十二

昔男ねんごろにいひ契りける、女のことざまに成にければ

すまのあまの塩やく煙風をいたみ思はぬ方にたなひき引にけり

百十二 ことざまに成にければ よそにかよう也。

○すまのあまの…… すぐに立べきけぶりの、風にさそはれてよそへなびくと也。こと人に通ふをたとへていへり。

○風をいたみは、風にふかるゝ心也。

(第一一三段)

百十三

むかし、男やもめにであて

ながゝらぬ命のほどに忘るゝはいかにみじかき心なるらむ

百十三 やもめにて 業平を捨てたる女の有也。

○ながゝらぬ命の…… 命はみじかき物也。その間をたに、そひはですしてすつるはいかにみじかき心ぞやと也。

(第一一四段)

百十四

昔仁和のみかど、せり川に行幸し給ひける時、いまはさることにげなく思ひけれど、もとづきにける事なれば、おほたかの、たかゝひにてさふらはせ給ひける、すりかりぎぬの、たもとにかきつけ、る

おきなさび人なとかめそ狩衣けふばかりとぞたづも鳴なる

おほやけの御けしき、あしかりけり。をのがよはひを思ひけれど、わかゝらぬ人はき、おひけりとや。

**百十四** 仁和のみかど 光孝天皇也。此段、時代業平と相違の事

あれ共、行平の事なればよせ有によりて、物語の作者かく作なす也。

○芹川 せうかは さが野に有。

○今はさる事にげなく 行平年よりて鷹たかなどすゆる事にあはぬやうに思へ共也。

○もとづきにける事なれば もとより鷹の事しつけたる上手しやうずなれば、御門より仰付らる成べし。

○すり狩衣かみこの袂に書付 行平歌を書付る也。

○おきなさび…… おきなさびは翁なれども、爰にては老おののざればうたると言心有べし。出立でたちを若するをいへり。たまさかの行幸なれば、かやうに出立を人などがめそ、我けふばかりこそ鷹かひをもすべけれど也。

○おほやけのみけしきあしかりけり 此歌を御門の聞召て御氣しきあしく成給ふ也。行平はわが六十にあまり、七十に及事をよめ共、此御門五十七才にておはしませば、けふばかりとぞたづも鳴なる、といへるを、不吉におぼしめす也。

(第一一五段)

**百十五**

昔みちのくにて、おとこ、女住けり。男都へいなんといふ。此女いとかなしうて、馬のはなむけをだにせんとて、おきのゐて、みやこじまといふ所にて、酒のませてよめる

京 おきのゐて身をやくよりも悲しきは都しまべの別成けり

**百十五** おきのゐみやこ嶋 奥州の名所也。

○おきのゐて身をやく…… 業平にわかるれば、火を身にすへてや

くよりもかなしき、となり。

(第一一六段)

**百十六**

昔、男すゞろに、みちのくにまで、まどひいにけり。京に思ふ人にいひやる

拾遺万葉 波間よりみゆる小嶋の浜びさし久しく成ぬ君にあひみてなにも、みなよくなりけり、となんいひやりける。

**百十六**

○浪まよりみゆる…… 序歌也。久しく成ぬ君にあひみて、といはんとて、上句をかくいへり。

○はまびさしは、はまに有家を言也。とまびさし、板びさしなどいふがごとし。

○何事もよく成にけりとなんいひやりける 業平の身上何事もなく、よく成たるを心安思へといひやれる也。文の詞成べし。

(第一一七段)

**百十七**

昔、御門すみよしに行幸し給ひけり。

古今無作者 我みても久しく成ぬ住吉のきしの姫松いく代へぬらん

おほんがみ、げぎやうし給ひて

新古今 むつましと君はしら波みづがきの久しき代よりいはひそめてき

**百十七** 御門住吉に行幸 文徳天皇、天安元年に住吉に行幸し給へり。

○我みても久しく成ぬ…… 心明也。ひめ松は小松の事といへ共、

只岸に生たる松にて、ひめに心なし。幾世をかくてありつらんと也。

○おほん神げきやうし給て　げきやうは、住吉の神の御かたちをあらはし給心也。

○むつまじと君はしら波　君はしら波は、君はしらずやと言心也。

みづかきは、ひさしきといはんとて枕詞也。久しき代よりは当社たかしの神垂跡たらしの事成べし。住吉の神御歌也とかや。

(第二一八段)

百十八

昔男久しく音もせて、わする、心もなし。参りこむといへりければ

古く 昔作者 玉かづらはふ木あまたに成ぬればたえぬ心のうれしげもなし

百十八 久しく音もせてわする、心もなし…… 業平の女の方へ久

しくおとづれせぬ也。

○玉かづらはふ木あまたに…… 玉はほめて言詞也。草かづらの木

ひとつにもまとはずして、あまたの木のうちこちへとり付て有物なれば、我にたえぬ心とありて、いま参こんといふもうれしからず、

といふ也。

(第二一九段)

百十九

昔女のあだなる男のかたみとてをきたる物共を見て  
古今 昔作者 かたみこそ今はあだなれこれなくは忘る、時もあらまし

物を

百十九 あだなる男 業平也。

○かたみとて…… 女のよめる也。

○かたみこそ今はあだなれ…… 歌の心あらは也。

○あだ人なれば思ふてもかひなし。され共かたみをみれば、なましるに思ひ出れば、此かたみも今あだ物なりと也。

(第二二〇段)

百二十

昔、男女のまだ世へずとおほえたるが、人の御もとにしのびて物きこえてのちほどへて

古く 昔作者 あふみなるつくまの祭とくせなんつれなき人のなべの数みん

百二十

女のまだよへずとおほえたるが…… よへずとは、女のいまだ男のはだをもふれぬと思ひたるが、人にあひたるといふ事を聞て、業平のよめる也。

○あふみなるつくまのまつり…… 近江の筑馬つくまと言所に神有。其祭

の日、女の男にあひたる数程なべをかつぐ事有。これらはみなあだくしき女也。其ごとくそなたをも、つくまの祭にいだして、そなたのなべのかずのおほく有べし。それをみたきと也。心は我にはつ

れなくて、人に心をかはずほとに、とらむる也。

1、「ほと」は「ほど」とあるべき。

(第二二一段)

百廿一

昔、男梅つばより、雨にぬれて、人のまかり出るをみて  
鶯の花をぬふてふ笠もかなぬるめる人にきせてかへさん

返し

鶯の花をぬふてふ笠はいな思ひをつけよほしてかへさん

**百廿一** 梅つばより雨にぬれて人のまかり出るをみて 梅壺は大

内にあり。人誰共なし。業平の友成へし。歌は業平也。

○鶯の花をぬふてふかさもがな…… 是は催馬楽に青柳をかたいとによりて、鶯のぬふてふ笠は梅の花笠といふをとりてよめり。

○ぬるめる人は、雨にぬる、人也。かへし、

○鶯の花をぬふてふかさはいな…… 鶯の花をぬふてふかさはいや、そなたの心のかさをつけて給はれ、さあらば其こゝろざしをほうぜんと也。又業平の歌にぬるめる人とあれば、それに対してほしてかへさんとなり。又思ひを火によそへたり。思ひをつけよ、それにてほすべきと也。

(第一二二段)

**百廿二**

昔、男ちぎれること、あやまれる人に

新古今 山城のあでの玉水<sup>みづ</sup>手に結びたのみしかひもなき世成けりと、いひやれどいらへもせず。

**百廿二** 契れる事あやまれる人に 契りをく事あやまり契約<sup>けいやく</sup>をたがひたる也。

○山しろの井手の玉水…… 井手の玉水はたちばなの諸兄<sup>もろあ</sup>のほりし井也。玉水とはほめたる儀也。是井手の左大臣と言也。左大臣死する時、我を思ひ出さば、此水へ来てみるべし。影<sup>かげ</sup>をうつして見せんといへり。後に行てみれ共、其影みえずと也。其ごとくたのみしかひもなく、たがひたる事にいへり。

○といひやれどいらえもせず 返しめせずなりしと也。

1、原文のまま。

(第一二三段)

**百廿三**

昔、男有けり。ふか草に住ける女を、やうくあきがたにや思ひけんか、る歌をよみけり。

古今 年をへて住こし里を出ていなばいと、深草野とや成なん女返し

野とならばうづらと成て鳴をらんかにだにやは君はござらんと、よめりけるに、めで、ゆかんと思ふ心なく成にけり。

**百廿三** 深草に住ける女 誰共なし。

○年をへて住こし里を…… 歌の心明也。すてはて、後の女の事を思へる心、業平の本性成をや。

○野とならばうづらと成て…… 前の歌、野とや成なんといへるに答て、いかにもものとならば、我はうづらと成て鳴べし。かり初にも

君が立よらぬ事はよもあらじと也。

○かりを狩<sup>かり</sup>の心にみるはわろし。

(第一二四段)

**百廿四**

昔男いかなりけることを思ひけるおりにかよめる

思ふ事いはでぞたゞにやみぬべき我とひとしき人しなれば

**百廿四** ○思ふ事いはでたゞにや…… 此歌の心儀理さまぐ有といへども無用の事成とかや。只心になかなふ人も世になければ、思ふ事をいはでむなしく過る也。大かたかやうにておくべきにや。

(第一二五段)

**百廿五**

昔、男わづらひて、心ちしぬべくおほえければ

古<sup>ふる</sup>終に行道とはかねてき、しかどきのふけふとはおもはざりしを

### 百廿五

昔男わづらひて……

○つゝに行道とはかねて聞しかど……この歌業平にかぎらず、一切衆生の辞世也。かくある事はしれども其きはならではおどろかぬならひなり。抑此物語には業平の一生をしるせば、はじめに元服の事をのせ、をはりに此歌にて書はたしたる事、筆勢<sup>ひつせ</sup>かぎりなきものなり。

## 『伊勢物語首書抄』頭注についての覚書

本書奥書には、

伊勢物語板行世間に多しといへとも、或は文字のちかひ、かなつかひにあやまりこれ有に付、ことくあらため、童蒙のともからに此物語の大意をしらしめむと抄読くせを頭にしるし板行せしむるものなり。(翻刻(一)「掲載」)

とあり、この書は童蒙のためのものであることが示されている。本書については、大津有一氏によって書誌的紹介・研究がなされ(注1)、田中宗作氏によってより精緻な書誌的研究と、『伊勢物語』研究史的な位置付けについて言及がある(注2)。すなわち本書は「初めから童蒙の効果をねらつて作られた」「本格的通俗解説書」であり、「学問的には大した評価を与えられないかもしれないが、注釈書としての新しい形の創造、時宜を得て大いに流行した」とされる(注3)。

童蒙的効果をねらつた本書頭注がどのように先行注釈書を取り込んだのか。その引用関係と引用方法、注釈方法の特徴について、本稿は今少し具体的に検討し、本翻刻の覚書としてその一端を記しておくものである。本書頭注と先行古注釈書との比較検討にあたつては、網羅的に古注釈書を見るべきであるし、またそれぞれの諸本についても目配りが必要ではあるが、本稿はそこまでは至らず、竹岡正夫『伊勢物語全評釈—古注釈十一種集成—』(右文書院、一九八七年四月刊)所収の古注釈翻刻を利用した。本書頭注と関連のある古注釈書は旧注にあたり、そのうちの『伊勢物語愚見抄』『伊勢物語首聞抄』『伊勢物語惟清抄』『伊勢物語闕疑抄』『伊勢物語拾穂抄』を比較検討の対象とした。以下、本稿では、旧注名は「愚」「首」「惟」「闕」「拾」の略称で示し、引用はすべて竹岡書翻刻により、振仮名は略す。

### 一、先行旧注との引用関係

本書と先行旧注との引用関係はどのようなふうであろうか。

まず、問題にしたいのは北村季吟著「拾」からの引用関係である。「拾」刊行は本書の六年後の延宝八年(1680)であるが、寛文三年(1663)以前には成立している書である(注4)。「拾」は旧注最後のもので、それ以前の旧注をすべて取り込んでいる。もし引用関係があるとすれば、本書頭注と他の先行旧注との関係は「拾」を通した間接引用の可能性を含めて考えねばならない。

『拾』は、旧注を「一」「愚」「首」「惟」「惟」「玄」「一」「闕」の略号で典拠を示して引用し、それに松永貞徳の説である「師

説」、季吟自身の説である「愚案」を加えている。よつて本書頭注が「拾」を直接引用したかどうかは、他の先行旧注にはない「師説」「愚案」の独自説が取り込まれていれば、その可能性がある。調べた結果、そのような「師説」「独自説」の引用かとも思われる例を二例見いだせた。

(第二段)

本書頭注・こと心 よそにうつろふこゝろなき也。異心。

『拾』・こと心なかりけり 他<sup>師</sup>にうつるこゝろなき也。

(第二三段)

本書頭注・といひやれどいらえもせず 返しもせずなりしと

なり。

『拾』・<sup>師</sup>もとより心かはれる女なれば返歌もせずとねたき心願なき詞なるべし。

この二例は、他の先行旧注には当該記事がなく、説の選択として意図的に取ったものではない。また、後述するが、本書頭注の注釈方法の傾向は語釈中心であり、逐語訳的に『伊勢物語』本文の大意を取ろうとする。この二例の場合、特に『拾』から引用しなくても、本書頭注の独自文とも考えられる。『拾』との引用関係については今のところ不明とせざるを得ない。

よつて次に、『拾』からの間接引用の可能性にも配慮しつつ、本書頭注と他の先行旧注との引用関係について検討したい。

本書「大意」には「肖聞抄云」（翻刻（一）「掲載」とあり、引用旧注名として明確に出ているのは「肖」のみである。だが、本書頭注を翻刻する過程で、一番文言が同文的で近いと思われたのは「闕」である。『闕』は「愚」「肖」「惟」といった先行旧注を取り込み、江

戸期に新注が登場するまで大変權威をもった注釈書である（注5）。本書頭注は各先行旧注から直接引用したか、『闕』の引用を通して間接引用したか、その引用関係が問題となる。先行旧注の中からその独自文が採用されていれば、直接引用関係にある可能性が高くなる。以下、各先行旧注との直接引用関係をうかがわせる例を紙幅の関係で一例ずつのみ挙げる。例を挙げるに当たっては、まず本書頭注の例を最初に挙げ、次に先行旧注の該当箇所を挙げる。引用関係不明の『拾』も必要に応じて挙げる。傍線部は直接引用関係を思わせる根拠となった部分である。

（一）『愚』との直接引用関係を思わせる例。（第一四段）

本書頭注・くだかけ 家鶏、にはとり也。くだは、ちいさきものを言也。

『愚』・「くだかけ」は庭鳥の名也。鶏といふ字を「かけ」とはよめり。それに「くだ」といふ詞をそへたるは、ちいさきを「くだ」といへば、ちいさき鶏也。

『肖』・「くだかけ」は家の鶏と云心也。但庭鳥と心うる至極也。心は、夜ふかく啼て思人をかへせば狐にくはせんといへる也。

『惟』・「クダカケ」ハ、家鶏也。只「カケ」トバカリモヨメリ。万葉十一「里ナカニ鳴ナルカケノ、ヨビタテ、イタクハナカヌ、カクレ妻カモ」。

『闕』・天福本勸物「東国之習、家を「くだ」といふ。『かけ』家鶏也。鶏のなきたる故に夜ふかく人の帰りしなり。なかずはしばしもとまるべきにと云也。なきてかへせば夜明たらばきつねにはませんと也。（以下「惟」と同文により略す。）

『拾』・(典拠明記での『關』の引用により略す。)

本書頭注「くだかけ」を「家鶏」と語釈する旧注は他にもあるが、傍線部のように「くだ」を「ちいさき」と釈するのは『愚』傍線部のみである。

(2)『肖』との直接引用關係を思わせる例。(第三九段)

本書頭注・いたるはしたがふがおほぢ也　みこのほいなし、

此詞諸抄に心得がたしとあり。したがふは村上天皇の時の人也。後人わきに注したるを、書まがへたるにや。

『愚』・▽いたるはほいなし　源の順は從五位上能登守までなれり。梨壺の五人のうち也。父は左馬ノ頭樹本なり。「みこのほいなし」とは、父定の卿の本意にはたがひて至が好色の道ばかりにて家をもをこさぬといふなり。

『肖』・▽いたるは順がおほぢなり　此詞心得がたし。順は村上の時分の人也。後人の注したるなるべし。但諸本如此。▽みこのほいなし　此詞、又上につゝかす。「なをぞ有ける」のつゞきには、心は、内親王のため本意なき誑やう也。歎べき事也。時宜に叶はぬをさらふ也。

『惟』・「イタルハ、順ガオホヂ也」是「ノ不審也。古キ本ニモ、注ノヤウニ、チトサケテカケリ。注ニテモ、心得ガタシ。順ハ、天曆ノ帝ノ時ノ人也。延喜ノ時分ヨリモ有テ、天曆ノ比ノ人歟。遙ニ後ノ順ガ事ヲ、此物語ニノスル事如何。モシ後ノ人ノカク歟。至ガ系図ヲ、イハントテ、順ガオホヂトハ、カクナルベシ。「ミコノホイナシ」アメノ下ノ色好ミノ哥ニテハ、猶ゾアリケル、ミコノホイナシト、上ニツヅケテ、見ベキニヤ。其心ハ、崇子

ノ親王ノタメニハ、アマリホイナシ。死タマヘルモ其マデヨト、ヨメルハ、アマリナリト云リ。

『關』・「いたるは順がおほぢなり。みこのほいなし」是「ノ不審有。至は順がおほぢ、勿論なり。順は延喜の時分より有て天曆帝のころまで有し也。朱雀院の御宇承平七、天慶九、是をへだて、はるか後の順が事を此物語に載る事如何。若、後人のかく歟。到が系図をいはんとて順がおほぢと書なるべし。是はもし順が至が孫など、は可レ書歟。おほぢと書事不審なり。「みこのほいなし」又諸本に此分なれども、「色」このみの哥にては猶ぞ有ける」と云下へ「みこのほいなし」とつゞけて其次に「いたる」をよむべき歟。「ほいなし」は、かの哥の道理はよくいひたてたれども、内親王の爲にはあまりに愁嘆の心もなき様に聞ゆる事をいふ義なるべし。

『拾』・(典拠明記での『愚』『關』の引用により略す。)

本書頭注傍線部と同文的なのは『肖』傍線部のみである。点線部は本書頭注と同文的ではないが、内容的関連性の強い部分である。

(3)『惟』との直接引用關係を思わせる例。(第一五段)

本書頭注・えびす心をみては　ふてたる心也。此歌をうれしくは思へど、さやうのふるまひをしてはいかゞあらんと思ふ也。

『愚』・「えびす」はみちの国の人なれば「えびす心」といへり。又、えびすといふは西宮にましますひる子の神をえびす三郎といへり。其神はいさゝかのものにて心かたぶきやすき神なれば、それをえびすこゝろともいふ也。

『肖』・えびす心とは　たはむ方なくすぐなるやうの心也。さ

やうの心にてをしたるふるまひなど有てはいかゞせんと思へる也。

【惟】・「エビス心」エビスハ、タウム方ナクツヨキ所アリ。サヤウノ、フテタル心ヲモテ、ヲシタル義アリテハ、イカゞセント思ヘル也。

【闕】・「えびす心」えびすはたはむかたなく直につよき様の心也。

【拾】・<sup>師</sup>あづまえびす心といふ心也。

本書頭注傍線部「ふてたる心」の語があるのは「惟」傍線部のみである。二重傍線部は本書頭注独自文である。波線部は「惟」以外の旧注で本書頭注と同文的な部分である。

〈4〉【闕】との直接引用関係を思わせる例。(第三九段)

本書頭注・○此車を 業平のれる車也。○車なりける人 女とみるはわろし。業平なるべし。

【愚】・▽女車にあひのりて 中将、女と同車して御葬札をみけるなり。▽くるまなりける人…よめる「くるまなりける人」とは女をいふ。

【肖】・▽此車を女ぐるまを見て 業平と女とのりたる車の事也。▽車なりける人 女也。誰とはなし。

【惟】・「此車ヲ、女車トミテ」業平ノ、女ト、ノル車也。

【闕】・「此車を女車と見て」業平のをんなと同車したるを女ばかりとみて、…。「車なる人」女と見るはわろし。業平なるべし。

【拾】・(典拠明記での「愚」【肖】の引用により略す。)

本書頭注傍線部と同文なのは【闕】傍線部のみである。この例以外にも【闕】との同文的文言は他の旧注より圧倒的に多い(注6)。

各旧注での項目の立て方や配列についても目配りが必要ではあるが、以上から本書頭注では、本稿で検討した「愚」「肖」「惟」「闕」から直接引用している可能性があるとの見通しを立てられそうである。

補足として、〈2〉の傍線部では、「肖」が「此詞心得がたし」とあるのに対し、本書頭注は「此詞諸抄に心得がたしとあり」とあり、「諸抄に」という言葉が入っている。「諸抄」とは、この文脈では先行旧注群を指すことになる。すると〈2〉点線部で示した「惟」や【闕】の「不審」といった文言の内容も指すことになる。本書頭注が特定の先行旧注の文言を丸写ししているのではなく、他の「諸抄」をも視野に入れつつ、文言の改変をなしている証拠とはならないだろうか。また、〈4〉は、〈2〉と同じ第三九段である。本書頭注では第三九段の注をなすときに、特定の先行旧注にこだわることなく対照しながら、引用の取捨選択を行っていたことが伺われる。それは、〈3〉の波線部についても言える。波線部の文言は「惟」ではなく「肖」に近い。同じ項目内の文言でも先行旧注を対照しながらの引用の取捨選択がある。本書頭注をなすにあたっては、各先行旧注をそれぞれ座右に置いて直接的に見ていたのではないかと思われる。

## 二、童蒙書としての引用・注釈方法

本書は童蒙のための書であり、先行旧注からの引用方法や注釈方法はそれに合わせてのものだったであろう。以下、そのことを検討する。

まず、一章にて挙げた(1)～(4)の引用関係検証の例で、先行旧注からの引用方法を見てみる。

(1) 本書頭注は「くだ」の語釈を挙げる「愚」を引用する例から、語の原義によって意味を解釈しようとする姿勢がみられる。「惟」「關」は『万葉集』など他書を引用して説明するが、本書頭注は「伊勢物語」の大意とは直接関わりのない、知識的な引用はしない傾向が強い。

(2) 先行旧注は「伊勢物語」登場人物「順」の歴史事実との矛盾を考察する記事があるが、本書頭注は「伊勢物語」の大意とは直接関わらない、学問的な考証引用はしない傾向が強い。

(3) 「惟」の「フテタル心」は「タワム方ナクツヨキ所」ある「エビス心」の説明を言い換えた文言であり、他の先行旧注も長く説明する。その中から本書頭注は「えびす心」の語釈として「ふてたる心」一語を引用する。長い説明よりも一語に対し一語を当てるような簡潔な文言でもって語釈をしようとする傾向が強い。

(4) 先行旧注では「車なりける人」が「女」とする説と「業平」とする説とがあり、本書頭注は「業平」説を取る。行為主体に対する本書独自の見解でもって先行旧注の取捨選択と引用がある。(4)の例だけからはわかりにくいだが、本書頭注では「伊勢物語」作品中の行為主体が誰かを明確に示そうとする傾向が強く、先行旧注からの引用もその点にこだわりがある。紙幅の都合で詳しくは例示しないが、本書頭注では、作中人物の注として独自に「誰ともなし」の文言を加えることが多い。これも作品中の行為主体が誰かを明確に示そうとする傾向の裏返しと言える。

本書頭注の引用方法は、知識・学問的な考証引用はあまりせず、一

対一の語釈をするように平明・簡潔化し、作品中の行為主体、すなわち主語を明確化するような方法で先行旧注の取捨選択と引用を行っている。

次に本書の注釈方法について見てみる。その特徴を端的に示すのは、本書独自文である。第九段(いわゆる「東下り」の段)から例を挙げる。傍線部は本書頭注にのみ見られる独自文である。

本書頭注・身をやうなき物に 業平王孫にて有ながら、官もあさく、ことに流人と成給ふ事、好色の道にまよふゆへなりと、我と身をおもひをとり、世の用なき身と思へる成べし。

『愚』・「ようなき」は無用なり。世に用ひられぬ身と思ひて東まのかたに住ともめゆく也。

『肖』・業平は王統三代の人ながら官位もあさく、結句流罪の身となれり。仍用なき身となるよし也。

『惟』・業平ノ、我身ハ、世ノ用ニ、タツベキ者ニモアラズ、ト、思クタス也。

『關』・業平のいやしき身にてもなければども官なども浅く我身は世の用に立べき物にあらずとおもひくたす也。又世に用らるべき身にてもなきと思ひて也。

『拾』・(典拠明記での「愚」「惟」の引用により略す。)

本書頭注と最も文言的に近いのは「肖」であり、内容的には他の旧注もほぼ同じである。その中で傍線部は「伊勢物語」本文に直接的に記されていない、「身をやうなき物に」した理由を補足的に解説している。作中人物の心情に寄り添った解説で、一章で挙げた(3)の本書頭注独自文(二重傍線部)も同様である。学問的というより

も作品鑑賞的な注である。

本書頭注・○その山をこゝにたとへば 此れより物語の地也。  
京にて書故に、こゝにたとへばといへり。

【愚】富士の山の高さをおしはかるに、都にてひえの嶽を廿ばかりかさねあげたらん程にみゆるといへるなり。

【肖】上の富士の注也。追而注するうへは、都にてひえの山にたとへていはんこと、うたがひなし。

【惟】闕【拾】（該当記事なし。）

傍線部に示した「物語の地」である注記は、この例以外にも本書頭注独自文にたくさんある。このような本文解析的注記は先行旧注にも見られるのでオリジナルなものではないが、この注記を記すことにこだわりがあることが明確である。【伊勢物語】本文そのものを読解しやすくするための注記である。

本書頭注・○かれいひくおけり 飯の惣名也。朝がれいひといふも御門に奉貢御也。さはべになみある也。旅行のさま也。有

間のわうじ、家にあればけにもるいひを草枕たびにしあればしゐのはにもる

【愚】「かれいひ」は旅の食物なり。「干飯」とかく。又「餉」の字をもかれいひとよめり。

【肖】旅行にあるさま也。有間皇子孝徳御子「家にあればけにもるいひを」などよみ給へる事もあり。

【惟】「カレイヒ」家ニアレバ、ケニモレイヒヲ、草枕、旅ニシアレバ、シイノハニモル、有間、王子、ヨミ玉ヘリ。

【闕】「かれ飯」干飯又餉と書なり。旅の中途の食などの事也。

有間王子の哥に、孝徳天皇の御子也。「家にあればけにもる飯を草枕旅にしあれば椎のはにもる」

【拾】（典拠明記での「愚」「惟」の引用により略す。）

傍線部は「かれいひ」の語釈である。「旅の食物」とする先行旧注と異なり、「飯の惣名」といった独自の見解を述べている。この語釈では「かれいひ」は「旅」と結びつかない。傍線部「さはべになみある也」は、「伊勢物語」本文にある「其沢のほとりの木かげにおりゐて」の説明となる文言であり、それを本書頭注では「旅行のさま」と説明している。本書頭注では、文脈の中での特別な語の意味よりも語の原義を優先した語釈にこだわるようである。また、逐語訳的な態度で一語一語の語釈に徹しようとする。

以上から本書頭注の引用方法や注釈方法の特徴として、「伊勢物語」本文の大意を取るのに不必要な考証的知識は引用せず、逐語訳的態度での平明な言い換えや一語対一語の簡潔な語釈、主語の明示、作中人物の心情の補足解説など、「伊勢物語」を知識学問的ではなく、本文そのものに即した作品鑑賞的な態度で読解しやすくする方法が取られている。これはまさに「童蒙的効果」の意図をもつて編集された、現代でいう古文学習参考書のような注釈書であるといえよう。

（注1）大津有一「伊勢物語古註釈の研究」増訂版、八木書店、一九八六年、五二七～五三〇頁、（初版、石川国文学会、一九五四年）。本翻刻と同版の石川県立図書館李花亭文庫本「頭書伊勢物語抄」や種々の板本について言及がある。

（注2）田中宗作「伊勢物語研究史の研究」桜楓社、一九六五年、

一五一～一六二頁、三三四～三三六頁。

(注3) 注2、同書、一五五頁。

(注4) 注1、同書、五〇八～五一〇頁参照。

(注5) 注2、同書、二九～四六頁「伊勢物語闕疑抄の地位と特色」参照。

(注6) 本書頭注における「闕」を中心とした先行旧注の取り込みは全段を通じて見られるが、特に第七〇段以降、その傾向が強くなるようである。刊本「闕」は、卷一（初段～一五段）、卷二（一六～三六段）、卷三（三七～六九段）、卷四（七〇～九三段）、卷五（九四～終段）と構成され、第六九段（いわゆる「狩の使」の段）は「闕」の卷三の終りにある。あるいはそのような書誌的事情が関連しているのかもしれない。